

オーラルヒストリーから見る「グローバル人材」の実像

岡山大学 言語教育センター 那須 雅子
日本国際教養学会第4回全国大会 ポスターセッション (平成27年3月14日)

■研究の背景と目的

平成26年度には文部科学省の「スーパーグローバル大学創生支援(Top Global University Project)」事業により、10年間にわたる大規模な取り組みが日本各地の大学でスタートした。一方で、「グローバル人材」の定義そのものが組織によっては分野や各人によって様々である。どのような「グローバル人材」を育成するのかというモデル像を明確にする必要がある。仮にグローバル人材に必要とされる能力や資質を明確化できたとすれば、それらは、大学などの教育機関で教えることができるものなのだろうか。これらの課題に取り組むうえで、現在活躍中のリアルな「グローバル人材」の実像を詳細に明らかにしてみることが有益ではないか。本研究では、世界的に活躍している現役「グローバル人材」に、国際社会を生き抜くために「必要とされる力」や「心得」についてインタビューを行った。世界に通用する「グローバル人材」の実像に迫りたい。

■先行研究

「池上彰と考えるグローバル人材とは何か」 JICAニュース (平成25年10月10日)
http://www.jica.go.jp/topics/news/2013/20131010_01.html

- 「世界に通用する人間であると同時に、日本の良さも自覚した上で働くことのできる人材」
(池上 彰 ジャーナリスト)
- 「『メイド・イン・ジャパン』という言葉があるが、これからは『メイド・ウィズ・ジャパン』、『ともに寄り添う』という発想で、物やサービスを考えていかなければいけない。これがグローバル人材の定義の一つではないか」
(山川 龍雄 『日経ビジネス』編集長)

「文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」採択事業キックオフシンポジウム
岡山大学 「PRIMEプログラム」～世界で活躍できる『実践人』を育成する!」
(平成26年11月24日)

- グローバル人材とは以下の要素を兼ね備えた人材である。
 1. Integrity (Well-balanced character)
 2. Generosity
 3. Curiosity
 4. Voluntarism

(木村 孟 文部科学省顧問)

■現役「グローバル人材」をインタビュー 2015. 2/17, 2/18



「僕は牧師であったというのが最大の武器です。
イスラムも、ユダヤも、キリスト教徒も、聖書を読む民族です。聖書の中身を信じているから、彼らの言葉、彼らの発想が分かります。」

■石井希尚・久美子夫妻
日本の和の心を音楽と語りを通じて発信する一座 Heavenese として、2012年米国デビュー。2014年には外務省後援を受けてエルサレムにて公演。

石井希尚氏: グローバル人材とは、「違うものが共存する難しさを乗り越えられる人材」
「ローカルの自覚(Duty of Localism)がある人が、真の国際人になれる」
「ローカルにある個々の力が高まることによって、自分に価値があると思え、相手にも価値を見出すことができる」

自分を知る (自己肯定的なアイデンティティを持つ)

- 相手と繋がる (牧師として学んだ『聖書』の言葉で '日本精神' を語る)
- 戦略的になる (出すところと引くところを調節する)

【メッセージ】

難しいことは、日本人としての良さが裏目に出ることがあることだ。
戦略的になれる日本人を教育していかなくてはならない。

【語学力について】

語学は道具として絶対に必要です。現実として、英語力は効果的に自分を発信できるツールとして避けがたく重要である。

河合氏: ビジネスの領域において、グローバル人材とは、
「ローカライゼーション」と「グローバルライゼーション」のつまみの調整ができる人材」
「文化背景を理解していなければ、全くダメです」
「文化背景×市場背景×〇〇〇などのパズルを組み合わせる能力のある人材」

相手を知る (アジアの造詣: シニョリテリシステム、大家族主義、世襲制などを深く理解する)

- 友達になる (共通項を見つける)
- 手綱を持ち、さじ加減を調節する (引き出しを持って呑み込まれない自分を持つ)

【メッセージ】

日本人は、十分に押しが強い。日本人はもっと柔軟になるべきだ。
外国とどう対峙していくか、対応していくかという時、フレキシビリティが問われる。
Critical thinking を身に付けていくことが重要だ。

【語学力について】

英語は不可欠のツールで絶対に必要です。英語の媒介を通して、「日本の姿」を見ている。
アジア諸国における「華僑」の影響力によって、中国語の重要性が極めて高い。
したがって、トライリンガル(日本語、英語、中国語)が必要とされている。

「アジアの場合、
インターナショナルというより
『インターアジア』です。」

「日本の大企業の多くは、多様化するグローバル化にもっと
「柔軟に」対応していかなければなりません。」



■河合友弘氏(右)
ポタジェ・アジア・パシフィック代表取締役

野菜スイーツ事業を展開する日本ポタジェブランドおよびそのプロジェクトを、香港ベースでアジア太平洋地域において、「橋渡し=ブリッジング」する役割を担う。

■インタビューの考察と今後の課題

現代社会の変化の中で格闘する「グローバル人材」の実像は多様である。オーラルヒストリーという語りを通じて、その多様性をリアルに伝えていくことは教育現場にできることの一つではないか。また、「グローバル人材育成」の実践アプローチの一つとしては、欧米社会(西洋)とアジア地域(東洋)という大きな枠組みの視点を踏まえて、教授内容を体系化する必要があるのではないか。「国際教養学」を確立していく取り組みを早急にスタートすべきであろう。

キーワード: グローバル人材、オーラルヒストリー、リベラル・アーツ、国際教養学